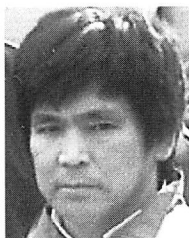


学生レスリングに活力を！



コーチ 山本 茂廣

私は、1977年に関西大学へ入学した。私の現役時代は、学園紛争のあおりを受けて体育推薦制度が失われた後であり、大学から競技を始める選手が主体のチームであった。私自身も、大学に入学してからレスリングを始めた。そのため、リーグ戦では勝ったり負けたり、チームも1部と2部を行ったり来たりという苦しみを味わった。しかし、個人戦では、私と同期であり現在総監督の横山が、西日本で新人戦を含め1年次から両スタイル計7回優勝している。また、1年下で現在兵庫県立猪名川高校の教員としてレスリングを指導している亀田は、西日本選手権グレコ52kg級3連覇、全日本大学選手権3位という輝かしい実績をあげた。

われわれ大学スタート組は、彼らのおかげで比較的速やかにレスリングを吸収し、レベルアップすることができたのだと、今でも感謝している。そんな彼らは、まさに自慢の同期・後輩であり、前述のとおり今日に至るまでレスリングに携わっていて、母校レスリング部の発展にも大いに力を尽くしてくれている。

私自身も、レスリングへの思いは断ちがたく、小学校教員に転職して以降は、チビッコ教室での指導や国際審判員として、レスリングに恩返しをしてきた。そして、2000年からは母校レスリング部のコーチとして、微力ながらお手伝いをさせていただいている。とくに、2003年にSF入試制度が開設され、わが部にも優秀な選手を獲得できる機会が広まってからは、私の地元である兵庫県レスリング協会や各都道府県の審判員とのネットワークを活用して、本学を受験してくれる選手を探すスカウト活動に力を注いできた。

このように、心血を注いでチームづくりをするというのは本当にやりがいのある仕事である。彼ら、彼女らが、勧誘の甲斐あって関大に合格し、汗まみれになってマットに上がる姿を見ると、つい胸に熱いものがこみ上げてくるのを抑えがたくなる。

実際、SF入試制度が始まって以降、わが部は急速に力をつけてきた。他大学からの視線が変化してきたことも実感している。しかし、体育推薦喪失後の長い期間にわたって、私たちが紡いできた関大レスリングの伝統のひとつとして、冒頭に述べた大学から競技を始める選手たちの成長があると思う。経験者が中心のチームになったとしても、この伝統はぜひ受け継いでいただきたい。幸いにも、少なくなったとはいえ現在でも大学から競技を開始した小原や植田のような選手がいる。彼らには、本当に頑張ってもらいたい。経験者たちに伍してレギュラー争奪戦を盛り上げてほしいものである。

こうした状況は、西の古豪といわれる関学や同志社でも共通であるため、2004年度より関々同のOB会によって大学から競技を開始した選手によるオープントーナメント「アルキメデス大会」が開催されるようになった。大学スタートの選手が、学生レスリングの活力を支えてきたという認識は共有されているのだ。経験者の技量やリーダーシップと、初心者の情熱や向上心が結集されれば、わが部はもちろんのこと、学生レスリング全体の起爆剤となるはずである。

かつての私たちと同じように、大学スタートの選手たちが大いに活躍してくれることを切望している。